



Title	チュルク語北東語群の接辞頭子音交替
Author(s)	江畑, 冬生; Ebata, Fuyuk
Citation	北方言語研究, 12, 69-81
Issue Date	2022-03-20
DOI	https://doi.org/10.14943/101896
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/84905
Type	departmental bulletin paper
File Information	07_Ebata.pdf



チュルク語北東語群の接辞頭子音交替*

江畑 冬生
(新潟大学)

キーワード：チュルク語族、系統分類、形態音韻論、鼻音交替

1. はじめに

チュルク語族の下位分類には、いくつかの提案がなされている。シベリアのチュルク語族についていえば、サハ語を南シベリアのチュルク語と同じく北東語群に含めるか、それとも両者を別な語群に属すると見なすかという2つの立場がある。いずれの立場でも、サハ語の言語構造は南シベリアのチュルク語に比較的類似すると見なされている。サハ語と南シベリアのチュルク語は、下位語群をなすと見なしうる言語特徴を共有しているのか、それとも両者は大きく隔たっているのか。

本論文ではこの大きな問いの一端を明らかにするために、接辞頭子音の交替に着目した考察を行う。第2節では、サハ語と南シベリアのチュルク語(具体的にはトゥバ語・ハカス語・ショル語)の相違点と類似点を概観する¹。第3節では、これら4つの言語の接辞頭子音の交替について詳しく検討する。第4節では、接辞頭子音の鼻音交替に関して北西語群との対照を行う。第5節で本論文の結論をまとめる。なお本論文では、論旨に直接関係ない部分では母音調和や頭子音交替による接辞の異形態を捨象して示すことがある。

2. サハ語と南シベリアのチュルク語の相違点と類似点

チュルク語族の下位分類におけるサハ語の扱いには、大別して2つの見方がある。1つは、Benzing (1959), Johanson (1998), Johanson (2021: 22-23) のように、北東語群(シベリア語群)としてトゥバ語・ハカス語・ショル語等と同じグループに含めるものである。もう1つは、Menges (1959) や Poppe (1965) のように、サハ語およびドルガン語のみが1つの下位語群をなすという考え方である²。庄垣内 (1989) も、後者の考え方を妥当だとみなしている。ただし前者の分類でも、さらに小さなグループに分けた場合にはサハ語とドルガン語が1つの語群をなすとされる。一方で後者の分類でも、サハ語・ドルガン語に最も近いのはトゥバ語・ハカス語・ショル語等の南シベリアのチュルク語であると見なされている。従って2通りの分類方法は、実質的な部分では大きく異なるとは言えないのかもしれない。

* 本研究は、科研費(課題番号 17H04773, 18H00665, 18H03578, 20H01258, 21H04346) および東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の共同利用・共同研究課題「「アルタイ型」言語に関する類型的研究(2)」 「チュルク諸語における情報構造と知識管理 —音韻・形態統語・意味のインターフェイス—」の支援を受けたものである。本論文は、2020年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会(2021年3月20日 オンライン)において筆者が行った発表内容に基づいている。査読者からの貴重なご指摘に深く感謝する。

¹ 南シベリアのチュルク語には、他にもアルタイ語やトファ語などがある。ただし方言差の問題や資料の制約などから、本論文での主な考察対象は4つの言語に限定することにした。

² Schönig (1990) も、サハ語とドルガン語をチュルク語族の中で特別な位置を占めると考えるものである。また Tekin (1991) のように、さらに細かな下位分類を提案する研究もある。

それでは、サハ語と南シベリアのチュルク語は、どの程度似ているのだろうか。まず、南シベリアのチュルク語では共通するがサハ語のみが異なるような特徴を表1に示す³。

〔表1〕 サハ語と南シベリアのチュルク語の相違点

	シオル語	ハカス語	トゥバ語	サハ語
語末無声子音	すべて有声化	すべて有声化	すべて有声化	/t/有声化せず
語末/rt/複子音	有声化せず	有声化せず	有声化せず	有声化
1PL 所有接辞	-(i)bis	-(i)bis	-(i)bis	-bit
2SG 禁止接辞	-be	-be	-be	-(i)me
対格接辞	-ni	-ni	-ni	-(n)i
向格接語/接辞	=saara	-zer	-že	=dieki
形動詞過去	-gen	-gen	-gen	-bit
3SG 代名詞	ol	ol	ol	kini
再帰代名詞	pos	pos	bot	beye
肯否疑問接語/接辞	-be	=be	=be	=duo
3PL 主語標示	任意	任意	任意	義務的
副動詞の主語標示	不可	不可	不可	可能
形容詞の副詞用法	可能	可能	可能	不可
二重対格使役文	不可	不可	不可	可能
格 NP の述語用法	可能	可能	可能	不可

表1の諸特徴のうち、語末無声子音の有声化と格 NP の述語用法について具体例を用いた補足を行う（南シベリアのチュルク語のうちここではトゥバ語のみを例として示す）⁴。

表1に示す4言語では、語末無声子音は、母音始まりの接尾辞が付加する場合に有声化する（トゥバ語 *čaak* 「頬」: *čaag-im* 「私の頬」）。サハ語では語末/t/に限って例外的に有声化しないが、他の3言語では/t/にも有声化が起きる。例えばサハ語 *it* 「犬」: *it-im* 「私の犬」に対し、トゥバ語 *it* 「犬」: *id-im* 「私の犬」となる⁵。対照的に語末複子音/rt/は、サハ語でのみ有声化が起り、他の3言語では母音始まりの接尾辞が付加しても/t/が無声子音のままである。例えばサハ語 *tart* 「引く」: *tard-ar* 「引く-PRS:3SG」に対し、トゥバ語 *tirt* 「引く」: *tirt-ir* 「引く-AOR」である⁶。

³ 以降のデータに関して、サハ語およびトゥバ語の例は、筆者が実施したフィールドワークまたは筆者の作成したコーパス資料から得られたものである。シオル語の例は Dyrenkova (1941) および Daniyarova et al. (2012) に、ハカス語の例は Donidze (1997), Anderson (1998), Doniyorova et al. (2008) および筆者の作成したコーパス資料に基づく。ハカス標準語はサガイ方言とカチャ方言に基づく（庄垣内 1992; Roos et al. 2006）。シオル語にはムラス方言（標準語の基礎となった方言であり、ハカス語に類似するとされる）とコンドマ方言（アルタイ語に類似するとされる）がある。

⁴ これらの特徴の一部は、筆者による一連の研究（Ebata 2017; 江畑 2017; 江畑 2020）でも取り上げた。

⁵ Rassadin (1978: 23) から判断する限りでは、トファ語では語末/t/が有声化するものとしがないものがある。

⁶ 語末複子音/yt/では、シオル語では *ayt/ayd-ar* 「言う」のように有声化が生じるが（Dyrenkova 1941: 187）、トゥバ語では *üzeyt/üzeyt-ir* 「傾ける」のように有声化しないという相違も見られる。

トゥバ語・ハカス語・シオル語では、格接辞が付与された名詞句をそのまま名詞述語文の述語として用いることが可能である。サハ語ではそれが許されず、当該名詞句の後に *baar* 「いる/ある」を述語として置く必要がある。

[トゥバ語]

- (1) (men) *bažij-da* =men
 1SG home-LOC=1SG
 「私は家にいます」

[サハ語]

- (2) (min) *žie-b-er* *baar-bin*
 1SG home-POSS.1SG-DAT be-COP.1SG
 「私は家にいます」

次に、サハ語にも南シベリアのチュルク語にも共通するが、チュルク語族の他の語群とは異なる特徴を表2に示す。

[表2] サハ語と南シベリアのチュルク語の類似点

	シオル語	ハカス語	トゥバ語	サハ語
接辞頭子音交替	鼻音交替あり	鼻音交替あり	鼻音交替あり	鼻音交替あり
不定詞-mek	なし	なし	なし	なし
欠如接辞-siz ⁷	なし	なし	なし	なし
比較接辞-rek	なし	なし	なし	なし

管見の限りでは、北東語群だけに共通の特徴は多くはない。当然のことながら数の多寡だけが決め手にはならないが、表1と表2の比較は1つの指標にはなるだろう。以下では表2に示す諸特徴のうち、接辞頭子音交替について具体例を用いた補足を行う。

接辞頭子音交替とは、子音始まりの接尾辞が付加する際に、語幹末の音により交替を示すことを指す。表3に見るように、チュルク語族の複数接辞を観察すると、トルコ語のように接辞頭子音交替がない言語、カザフ語のように有声性に関する交替のみを示す言語、サハ語のように有声性および鼻音性の両方に関する交替を示す言語の3タイプが存在する⁸。有声性および鼻音性の両方に関する交替（本論文では鼻音交替と呼ぶ）は、北東語群には見られるが、他の語群では見られないかあるとしても散発的である。

⁷ たしかにサハ語には接辞-sizが無い。しかしながら欠如を表す句を形成する際、南シベリアのチュルク語とは異なり、サハ語では欠如接辞-(t)eを必要とする（トゥバ語 *ažil čok* 「仕事のない」に対し、サハ語 *üle-te suox* 「仕事のない」）。この点を重視するならば、欠如接辞に関わる特徴はむしろ表1に含めるべき特徴とも言える。なお Nugteren and Roos (2006: 119) によれば、サラル語も欠如接辞-sizを欠くという。

⁸ 査読者からの指摘によれば、トルコ語でも方言によっては鼻音交替を示すことがあるという。

[表 3] チュルク語族における複数接辞の頭子音交替

	トルコ語	カザフ語	サハ語
母音終わり	baba-lar 父-PL	bala-lar 子供-PL	oɣo-lor 子供-PL
無声子音終わり	at-lar 馬-PL	qazaq-tar カザフ-PL	mas-tar 木-PL
有声子音終わり	ev-ler 家-PL	köz-der 目-PL	baay-dar 金持ち-PL
鼻音終わり	koyun-lar 羊-PL	aqın-dar 詩人-PL	aan-nar 戸-PL

3. 北東語群の接辞頭子音交替

江畑 (2017) では、サハ語とトゥバ語の鼻音交替が接辞頭子音の調音点ごとに異なる振る舞いをすることを示した。これを踏まえて本節では、北東語群の4つの言語(サハ語・トゥバ語・ハカス語・シオル語)の鼻音交替に関して、接辞頭子音の調音点ごとに詳しく検討する。なお母音始まりの接辞と語末音節構造により挿入母音・挿入子音が現れるタイプの接辞は、本論文の考察対象外となる。

なお以下の表中の例では、煩雑さを避けるため詳細にグロスを付けることはせず、カッコ内に語幹の意味のみを併記するのみとする。表中で該当するケースが存在しない場合には欄内に「---」を記入する。

3.1. 両唇音始まりの接辞頭子音の交替

両唇音始まりの接辞には、否定接辞・1人称のコピュラ接辞・具格接辞がある。これらの接辞頭子音はすべて鼻音交替をする(この他にもシオル語の肯否疑問接辞-*be*、トゥバ語の継続接辞-*bišaan*、サハ語の遠過去接辞-*bit*と1PL所有接辞-*bit*が鼻音交替をする)。

[表 4] 否定接辞の頭子音交替(サハ語以外は2SG禁止接辞)

	シオル語	ハカス語	トゥバ語	サハ語
無声	čat-pa「横になる」	pas-pa「書く」	kes-pe「切る」	bis-pat「切る」
母音・有声	pil-be「知る」	irla-ba「歌う」	bar-ba「行く」	kel-bet「来る」
鼻音	kon-ma「泊まる」	tarin-ma「怒る」	xon-ma「泊まる」	toŋ-mot「凍る」

(サハ語の2SG禁止接辞は挿入母音を含む(-*i*)*me*)

[表 5] 1SG/1PLコピュラ接辞の頭子音交替

	シオル語 ⁹	ハカス語 ¹⁰	トゥバ語	サハ語
無声	alip-pim「英雄」	pianist-pIn 「ピアニスト」	---	biraas-pin「医者」
母音・有声	aŋči-bim「猟師」	klzI-blIn「人」	---	saxa-bin「サハ人」
鼻音	min-mim「私」	čalgizan-min「独り」	---	illen-min「暇」

(トゥバ語の1人称コピュラ接語=*men*と=*bis*には頭子音交替が生じない)

⁹ Dyrenkova (1941: 140) によれば、シオル語のコピュラ接辞では揺れや方言差が極めて大きいという。

¹⁰ Castrén (1857: 31) によるハカス語コイバル方言の記述では、*tok-pen*「私は満腹だ」と *kiži-ben*「私は人だ」が見つかるが鼻音交替の例は示されていない。

[表 6] 具格接辞の頭子音交替

	シオル語	ハカス語	トゥバ語	サハ語
無声	čip-pe 「糸」	---	---	---
母音・有声	sug-ba 「水」	---	---	---
鼻音	salgïn-ma 「風」	---	---	---

(ハカス語の具格接辞-*ney* は歯茎音始まりかつ頭子音交替が生じない。
トゥバ語の具格接語=*bile* とサハ語の具格接辞-(*i*)*nen* には頭子音交替が生じない)

3.2. 軟口蓋音始まりの接辞頭子音の交替

軟口蓋音始まりの接辞には、形動詞過去接辞・将然接辞(「将に～しようとする」を表す)・与格接辞がある。これらの接辞頭子音は、**サハ語のみが鼻音交替をする**(この他にもサハ語の2SG/2PL コピュラ接辞-*gin*, -*git* と2PL 所有接辞-*git* が鼻音交替をする。一方で他の3言語では、トゥバ語の継起副動詞-*geš* など以下で挙げられていない接辞も鼻音交替をしない)。

[表 7] 形動詞過去接辞の頭子音交替

	シオル語	ハカス語	トゥバ語	サハ語
無声	čet-ken 「達する」	pas-kan 「書く」	ut-kan 「忘れる」	---
母音・有声	par-gan 「行く」	odir-gan 「座る」	kel-gen 「来る」	---
鼻音	em-gen 「吸う」	togïn-gan 「働く」	xon-gan 「泊まる」	---

(サハ語の形動詞過去接辞-*bit* は両唇音始まり)

[表 8] 将然接辞の頭子音交替

	シオル語	ハカス語	トゥバ語	サハ語
無声	at-kalak 「撃つ」	sik-kalak 「去る」	čet-kelek 「達する」	---
母音・有声	kör-gelek 「見る」	čör-gelek 「動く」	kel-gelek 「来る」	---
鼻音	nan-galak 「戻る」	togïn-galak 「働く」	ün-gelek 「出る」	---

(サハ語は将然接辞を持たない)

[表 9] 与格接辞の頭子音交替

	シオル語	ハカス語	トゥバ語	サハ語
無声	čip-ke 「糸」	čas-ka 「時間」	ïyaš-ka 「木」	kïis-ka 「娘」
母音・有声	say-ga 「小石」	püür-ge 「狼」	xooray-ga 「町」	sir-ge 「土地」
鼻音	salgïn-ga 「風」	čïlan-ga 「蛇」	mün-ge 「スープ」	ilim-ŋe 「網」

3.3. 歯茎音始まりの接辞頭子音の交替

歯茎音始まりの接辞は、サハ語ではすべて鼻音交替をするが、それ以外の3言語では鼻音交替をするものとしなないものがある。

サハ語を除く3言語でも鼻音交替をするのは、複数接辞・PROP接辞・出名動詞派生接辞の3つである。これらの接辞は、母音の後で頭子音/l/で現れるという点でも共通する。

[表 10] 複数接辞の頭子音交替

	シヨル語	ハカス語	トゥバ語	サハ語
無声	sök-ter 「骨」	inek-ter 「雌牛」	ünüş-ter 「植物」	mas-tar 「木」
母音・有声	kaya-lar 「岩」	tülgü-ler 「キツネ」	kiži-ler 「人」	žie-ler 「家」
鼻音	ün-ner 「音」	aŋ-nar 「獣」	xem-ner 「川」	žon-nor 「人々」

[表 11] propriative 接辞の頭子音交替

	シヨル語	ハカス語	トゥバ語	サハ語
無声	palik-tig 「魚」	kaykas-tig 「驚き」	daš-tig 「石」	it-taax 「犬」
母音・有声	uya-lig 「巣」	pala-lig 「子供」	duza-lig 「利益」	žie-leex 「家」
鼻音	šolban-nig (人名)	taktün-nig 「味」	ertem-nig 「学問」	öŋ-nööx 「色」

[表 12] 出名動詞派生接辞の頭子音交替

	シヨル語	ハカス語	トゥバ語	サハ語
無声	tiš-te 「歯」	as-ta 「空腹」	kart-ta 「皮」	aččik-taa 「空腹」
母音・有声	kara-la 「黒」	miske-le 「キノコ」	baški-la 「先生」 ¹¹	žie-lee 「家」
鼻音	aŋ-na 「獣」	aŋ-na 「獣」	bežen-ne 「50」	ayan-naa 「旅」

これら以外の接辞は、サハ語を除く 3 言語では鼻音交替をしない。母音の後では、頭子音 /d, n, z/ のいずれかで現れる（サハ語では母音の後で頭子音 /t/ が現れる）。

[表 13] 定過去接辞の頭子音交替（3SG 形のみを示す）

	シヨル語	ハカス語	トゥバ語	サハ語
無声	kes-ti 「切る」	čit-ti 「達する」	ayit-ti 「示す」	aas-ta 「過ぎる」
母音・有声	pol-du 「なる」	oyna-dī 「遊ぶ」	udu-du 「眠る」	kepsee-te 「語る」
鼻音	kon-du 「泊まる」	aylan-dī 「回る」	čan-dī 「帰る」	gün-na 「する」

[表 14] 処格接辞の頭子音交替¹²

	シヨル語	ハカス語	トゥバ語	サハ語
無声	bulut-ta 「雲」	at-ta 「馬」	sös-te 「語」	mas-ta 「木」
母音・有声	uygu-da 「夢」	tag-da 「山」	tīva-da 「トゥバ」	uu-ta 「水」
鼻音	kün-de 「日」	min-de 「私」	saazīn-da 「紙」	xaan-na 「血」

（サハ語では分格接辞の形式を示す）

¹¹ トゥバ語では普通、語末 /t/ には頭子音 /t/ が現れる： *ir-la* 「歌う」、*üyer-le* 「洪水になる」。ただし頭子音 /t/ を持つ例外が 4 つ見ついている： *aar-ta* 「(病が) 重くなる」、*xovar-ta* 「薄くなる」、*xiyir-ta* 「横目で見る」、*ezer-te* 「馬に鞍を置く」。加えて *čügeer-le* ~ *čügeer-te* 「良くなる」のようにゆれが見られる例もある。

¹² 処格接辞由来の形式を含み「~での」を意味する派生接辞（シヨル語 *-dagi*、ハカス語 *-degi*、トゥバ語 *-degi* ~ *-deki*、サハ語 *-teeki*）も、同様の頭子音交替を示す。

[表 15] 対格接辞の頭子音交替

	シヨル語	ハカス語	トゥバ語	サハ語
無声	bulut-ti 「雲」	inek-ti 「雌牛」	doš-tu 「氷」	---
母音・有声	uygu-ni 「夢」	kii-ni 「空気」	boo-nu 「銃」	---
鼻音	kün-ni 「日」	ton-ni 「外套」	sigen-ni 「草」	---

(サハ語の対格接辞-(n)i には頭子音交替が生じない)

[表 16] 属格接辞の頭子音交替

	シヨル語	ハカス語	トゥバ語	サハ語
無声	bulut-tiŋ 「雲」	at-tiŋ 「馬」	eš-tiŋ 「友人」	---
母音・有声	uygu-niŋ 「夢」	kii-niŋ 「空気」	čugaa-niŋ 「話」	---
鼻音	kün-niŋ 「日」	ton-niŋ 「外套」	xem-niŋ 「川」	---

[表 17] 3SG 命令接辞の頭子音交替

	シヨル語	ハカス語	トゥバ語	サハ語
無声	tut-sun 「持つ」	ös-sin 「育つ」	ket-sin 「着る」	taŋis-tin 「出る」
母音・有声	ište-zin 「働く」	čurta-zin 「住む」	čurtta-zin 「住む」	ülelee-tin 「働く」
鼻音	kon-zin 「泊まる」	togin-zin 「働く」	sagin-zin 「思う」	siňnan-nin 「休む」

[表 18] 条件接辞の頭子音交替 (3SG 形のみを示す)

	シヨル語	ハカス語	トゥバ語	サハ語
無声	šik-sa 「出る」	korik-sa 「怖がる」	čet-se 「達する」	bis-tar 「切る」
母音・有声	sura-za 「訊く」	čookta-za 「話す」	di-ze 「言う」	sie-ter 「食べる」
鼻音	nan-za 「戻る」	čooktan-za 「話す」	dıştan-za 「休む」	kuttan-nar 「怖がる」

[表 19] 使役接辞の頭子音交替 (いずれの言語でも母音には後続しない)

	シヨル語	ハカス語	トゥバ語	サハ語
無声	kes-tir 「切る」	pas-tir 「書く」	doos-tur 「終わる」	aax-tar 「読む」
有声	kal-dir 「残る」	kör-dir 「見る」	xag-dir 「閉める」	kül-ler 「笑う」
鼻音	mün-dür 「乗る」	nan-dir 「帰る」	ün-dür 「出る」	tüm-ner 「結ぶ」

このように、歯茎音始まりの接辞頭子音交替は2つの類に分かれる。母音の後で/l/で現れ鼻音交替をするものと、母音の後で/d, n, z/のいずれかで現れ(サハ語の場合を除いて)鼻音交替をしないものである(サハ語では母音の後で前者は/l/で後者は/n/で現れる)。

ただし奪格接辞はどちらの類にも属さない例外であり、北東語群の間の差異も見られる。すなわちシヨル語とハカス語では鼻音交替をする¹³。トゥバ語では鼻音交替をしない。サハ

¹³ Anderson (1998: 4) では接辞頭子音に原音素 (archiphoneme) として -D と -D₂ を区別した上で “-D₂ does not undergo assimilation to the feature [nasal] ..., while -D does” と記述している。しかしながら原音素 -D は奪格接

語では音節構造により異形態が条件づけられており、形態素境界で子音連続が生じる場合には先行の語幹末子音に関わらず頭子音/*h*/が無声子音として保持される。

[表 20] 奪格接辞の頭子音交替

	シオル語	ハカス語	トゥバ語	サハ語
無声	kīš-taŋ 「冬」	inek-teŋ 「雌牛」	xep-ten 「服」	īraax-taŋ 「遠く」
母音	tura-daŋ 「町」	tūlgū-deŋ 「キツネ」	tayga-dan 「タイガ」	žie-tten 「家」
有声	kül-deŋ 「灰」	aal-daŋ 「村」	xöl-den 「湖」 ¹⁴	suol-taŋ 「道」
鼻音	čon-naŋ 「人々」	ton-naŋ 「外套」	xem-den 「川」	kiin-taŋ 「中心」

4. 北西語群との対照

本節では、前節で検討した鼻音交替に関して、チュルク語族全体、特に北西語群との対照を行う。はじめに接辞頭子音の交替パターンを、無交替型（交替しない）・無声型（有声性に関する交替をする）・鼻音型（有声性および鼻音性に関する交替をする）の3つに分ける。するとチュルク語族全体では、頭子音交替に関しておよそ以下の3つのグループに分けることが可能である。

- [1] 鼻音型のみ：サハ語・ドルガン語
- [2] 無声型と鼻音型：トゥバ語・ハカス語・シオル語などの北東語群
- [3] 無交替型と無声型：トルコ語・ウズベク語・バシキル語などの南西語群・南東語群・北西語群¹⁵

北東語群は、鼻音型を持つ点で他の語群と区別される。サハ語とドルガン語は、鼻音型のみを持つ点で北東語群の中でも特異である¹⁶。ただし表 21 に示すように、北西語群にも散発的に鼻音型が見られる。この中で奪格接辞に鼻音型を示す言語が多い点は、前節で述べたように北東語群の中でも奪格接辞が例外的な振る舞いをする点と関連して注目に値する¹⁷。

辞の頭子音にしか現れないため、この区別の必要性には疑問も残る。なお Anderson (1998: 13) の脚注 9 に “Yakut shows assimilation to [nasal] for the ABL. Thus, at least one other Turkic language has assimilation to [nasal] with the ABL affix” とあるが、表 20 から明らかなようにこの記述は誤りである。

¹⁴ トゥバ語では普通、語末/*h*/には頭子音/*d*/が現れる：*suur-dan* 「村から」、*deer-den* 「空から」。ただし場所や方向を表す語彙の一部には頭子音/*h*/の例外が見られる：*moor-tan* 「ここから」、*iškeer-ten* 「中から」など。

¹⁵ ただし Clark (1998: 63-64) の記述から判断する限りでは、南西語群に属するトルクメン語にも鼻音型があるかもしれない。一方で北東語群の中にも、鼻音型が散発的にしか見られない言語がある。Simpson (1955) によれば、アルタイ語（南方言）では奪格接辞のみが鼻音交替をするという。Biryukovič (1997) および Li et al. (2008) によれば、チュリム語では複数接辞のみが鼻音交替をするようである。

¹⁶ ドルガン語の情報は Barbolina et al. (2007) による。サハ語とドルガン語において鼻音型のみが見られる理由は、江畑 (2017) でも指摘したように Johanson (2002: 149-150) の「コイナー化」による平準化の結果なのかもしれない。

¹⁷ 西部裕固語 (Johanson 1998 の分類では南東語群に含まれ北東語群に起源を持つとされる) では、歯茎音始まりの3つの接辞のみが鼻音型のようなものである (Roos 2000; 钟进文 2007)。富裕キルギス語 (Johanson 1998 の分類では北西語群のキルギス語の方言であり北東語群との類似性を示すとされる) は、鼻音型を持たないようである (Hu and Imart 1987; 胡振华 1996)。Schönig (1998: 133-134) には、(本論文のようにデータを詳細に示しながら論じたものではないが) 興味深い先駆的記述が見られる。まず “progressive nasalization is

[表 21] 北西語群の鼻音交替

言語	鼻音型の接辞	出典
ノガイ語	奪格接辞・複数接辞・属格接辞	Csató and Karakoç (1998: 335)
タタール語	奪格接辞・複数接辞	Poppe (1968: 18)
カラカルパク語 カザフ語	奪格接辞	庄垣内 (1988); Doniyorova (2002) 中嶋 (2013)
キルギス語 バシュキル語 カライム語 クリミアタタール語 ¹⁸ カラチャイバルカル語	(なし)	Landmann (2011) Poppe (1964); Landmann (2015) Kocaoğlu (2006) Kavitskaya (2010) Doniyorova and Doniyorov (2005)

接辞頭子音の交替は、語幹末が母音である時に現れる音を基底とする同化として捉えることができる。ただし北西語群には、異化と見做すべきタイプの交替も散見される：バシュキル語の *qoral-dar* 「道具-PL」や *yalan-dî* 「ステップ-ACC」、カザフ語の *köm-be* 「埋める-NEG」など。キルギス語やカラカルパク語にも、同様の異化が見られる¹⁹。

一方で北東語群を見ると、ハカス語・ショル語には異化タイプの交替はない。トゥバ語では語末/l/に後続する環境で/d/が現れるので、これを異化タイプの交替と見なせる。サハ語では語末/r, y/に後続する環境で/d/が現れるが、これも異化タイプと考えることができる(表 22 には複数接辞の場合を示すが、他の接辞にも同様の交替を示すものがある)。異化タイプの交替をどのように位置づけるのかは、今後の課題とする。

[表 22] 北東語群の複数接辞における異化タイプの頭子音交替

	ショル語	ハカス語	トゥバ語	サハ語
母音	kaya-lar 「岩」	tülgü-ler 「キツネ」	kiži-ler 「人」	žie-ler 「家」
/l/	köl-ler 「湖」	čil-ler 「風」	xöl-der 「湖」	tîl-lar 「言語」
/r/	kar-lar 「雪」	matîr-lar 「英雄」	îr-lar 「歌」	xaar-dar 「雪」
/y/	koy-lar 「羊」	oñday-lar 「方法」	kaday-lar 「妻」	îy-dar 「月」

most powerful in Lena Turkic”との指摘は本論文の論旨に沿っている(“Lena Turkic”はサハ語とドルガン語を指す)。複数接辞よりも奪格接辞の方に鼻音交替が多く見られる点にも言及がある(ただしバシュキル語の奪格接辞にも鼻音交替があるとの指摘は、東部諸方言を記述した Maksjutova (1976) を含め筆者の調べた結果とは異なる)。奪格接辞の振る舞いが特異な点に関して“The ablative suffix ... is a special case because it ends with a nasal consonant”と述べられている点も興味深い。複数接辞および格接辞の頭子音交替を扱った Schönig (1993) も含め、筆者の主張と部分的に重なるところがある。

¹⁸ Kavitskaya (2010: 32-33) によれば、クリミアタタール語の“fast (colloquial) speech”においては接辞頭子音/l/が鼻音の後で/n/への同化を行うという(複数接辞と出名動詞派生接辞の例が挙げられている)。これは音声的な現象であり、形態音韻的規則である鼻音交替とは異なるものと考えておく。

¹⁹ Seegmiller (1996: 10) によれば、カラチャイ語には相互同化の例があるという(菅沼健太郎氏の御教示による): *küñ-ŋe* 「日に」(*kün* + *-ge*)、*katîŋ-ŋa* 「女性に」(*katîn* + *-ga*)。この現象をどのように解釈するかは今後の課題とする。なお同様の相互同化はサハ語でも生じる: *küñ-ŋe* 「日に」(*kün* + *-ge*)、*xallaan-ŋa* 「空に」(*xallaan* + *-ga*)。

5. まとめ

本論文では、チュルク語北東語群に属するサハ語・トゥバ語・ハカス語・シオル語の接辞頭子音交替を検討した。これら 4 つの言語の接辞頭子音交替に関する結論は、次の 5 点にまとめることができる。

- (1) サハ語の接辞頭子音は、調音位置に関わらずすべて鼻音交替をする。
- (2) シオル語・ハカス語・トゥバ語における鼻音交替は、調音位置により条件づけられる。両唇音始まりの接辞は鼻音交替をするが、軟口蓋音始まりの接辞は鼻音交替をしない。
- (3) 上記 3 言語の歯茎音始まりの接辞頭子音には 2 つの類がある。母音の後に /l/ で現れ鼻音交替をするものと、母音の後に /d, n, z/ のいずれかで現れ鼻音交替をしないものである。類の区別は、サハ語では母音の後の接辞頭子音の違い (/l/ と /t/) として反映する。
- (4) 奪格接辞の頭子音交替は例外的であり、北東語群の間でも相違点を示す。
- (5) 北西語群と対照すると、北東語群の特徴は鼻音型を持つ点にあると言える。ただし北西語群にも、奪格接辞などで散発的に鼻音型が見られることがある。

チュルク語族の下位分類においては、サハ語と南シベリアの言語（トゥバ語・ハカス語・シオル語など）を北東語群として 1 つにまとめる考え方と、両者を分ける立場がある。本論文で詳細に検討した接辞頭子音の交替パターンは、後者の見方を支持する結果となる。系統分類を行う上では、形態音韻論的な知見も考慮する必要があると思われる。

略号

ACC: 対格、AOR: アオリスト、COP: コピュラ、DAT: 与格、LOC: 処格、NEG: 否定、PL: 複数、POSS: 所有接辞、PROP: proprietive、PRS: 現在、SG: 単数

参考文献

- Anderson, Gregory David. (1998) *Xakas*. München: Lincom Europa.
- Barbolina A.A., N.M. Artem'ev, and Setsu Fujishiro. (2007) *Russko-dolganskij razgovornik s perevodom na japonskij jazyk i kommentarijami*. Fukuoka: Kyushu University.
- Benzing, Johannes. (1959) Classification of the Turkic languages. Jean Deny, et al. (eds.) *Philologiae Turcicae Fundamenta* I. 1-5. Wiesbaden: Franz Steiner.
- Biryukovič, R.M. (1997) Čulymsko-tyurkskij jazyk. V.N. Jartseva, et al. (eds.) *Jazyki mira. Tjurkskie jazyki*. 491-497. Moskva: Indrik.
- Castrén, M. Alexander. (1857) *Versuch einer koibalischen und karagassischen Sprachlehre nebst Wörterverzeichnissen aus den tatarischen Mundarten des minussinschen Kreises, im Auftrage der Kaiserlichen Akademie der Wissenschaften*. St. Petersburg.
- Clark, Larry. (1998) *Turkmen reference grammar*. Wiesbaden: Harrassowitz.
- Csató, Éva Ágnes and Birsel Karakoç. (1998) Noghay. Lars Johanson and Éva Ágnes Csató. (eds.) *The Turkic languages*. 333-343. London: Routledge.

- Daniyarova, Saodat, Shodiyor Daniyarov and Barchinoy Daniyarova. (2012) *Parlons shor*. Paris: L'Harmattan.
- Donidze, G.I. (1997) Xakasskij jazyk. V.N. Jartseva, et al. (eds.) *Jazyki mira. Tjurkskie jazyki*. 459-470. Moskva: Indrik.
- Doniyorova, Saodat. (2002) *Parlons karakalpak*. Paris: L'Harmattan.
- Doniyorova, Saodat and Chodiyor Doniyorov. (2005) *Parlons karatchay-balkar*. Paris: L'Harmattan.
- Doniyorova, Saodat, Djamilia Arzikulova, and Chodiyor Doniyorov. (2008) *Parlons khakas*. Paris: L'Harmattan.
- Dyrenkova, N.P. (1941) *Grammatika šorskogo jazyka*. Moskva/Leningrad: Nauka.
- Ebata, Fuyuki. (2017) The linguistic status of Sakha: A contrastive analysis with Turkic and Tungusic languages. Fuyuki Ebata and Tokusu Kurebito (eds.) *Linguistic Typology of the North*. vol.4, 53-66.
- Hu, Zhen-hua and Guy Imart. (1987) *Fu-Yü Gïrgïs: A tentative description of the easternmost Turkic language*. Bloomington: Indiana University.
- Johanson, Lars. (1998) The history of Turkic. Lars Johanson and Éva Ágnes Csató. (eds.) *The Turkic languages*. 81-125. London: Routledge.
- Johanson, Lars. (2002) Structural factors in Turkic language contacts. Richmond: Curzon.
- Johanson, Lars. (2021) *Turkic*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Kavitskaya, Darya. (2010) *Crimean Tatar*. München: Lincom Europa.
- Kocaoğlu, Timur. (2006) *Karay. The Trakai dialect*. München: Lincom Europa.
- Landmann, Angelika. (2011) *Kirgisisch: Kurzgrammatik*. Wiesbaden: Harrassowitz.
- Landmann, Angelika. (2015) *Baschkirisch: Kurzgrammatik*. Wiesbaden: Harrassowitz.
- Li, Yong-Söng, et al. (2008) *A study of the Middle Chulyum dialect of the Chulyum language*. Seoul: SNU Press.
- Maksjutova, N.X. (1976) *Vostočnyj dialekt baškirskogo jazyka*. Moskva: Nauka.
- Menges, K.H. (1959) Classification of the Turkic languages. Jean Deny, et al. (eds.) *Philologiae Turcicae Fundamenta I*. 5-8. Wiesbaden: Franz Steiner.
- Nugteren, Hans and Marti Roos. (2006) Prolegomena to the Classification of Western Yugur. Marcel Erdal and Irina Nevskaya. (eds.) *Exploring the eastern frontiers of Turkic*. 99-130. Wiesbaden: Harrassowitz.
- Poppe, Nicholas. (1964) *Bashkir manual*. Bloomington: Indiana University Press.
- Poppe, Nicholas. (1965) *Introduction to Altaic linguistics*. Wiesbaden: Harrassowitz.
- Poppe, Nicholas. (1968) *Tatar manual*. [Second revised edition]. Bloomington: Indiana University Press.
- Rassadin, V.I. (1978) *Morfologija tofalarskogo jazyka v sravnitel'nom osveščanii*. Moskva: Nauka.
- Roos, Martina Erica. (2000) *The Western Yugur (Yellow Uygur) language: Grammar, texts, vocabulary*.
- Roos, Marti, Hans Nugteren, and Zinaida Waibel. (2006) Khakas and Shor proverbs and proverbial sayings. Marcel Erdal and Irina Nevskaya. (eds.) *Exploring the eastern frontiers of Turkic*. 157-192. Wiesbaden: Harrassowitz.

- Schönig, Claus. (1990) Classification problems of Yakut. Rémy Dor. (ed.) *L'Asie centrale et ses voisins*. 91-102.
- Schönig, Claus. (1993) Anlautvarianten von Plural- und Kasussuffixen im Türkischen. *Journal of Turkology*. vol.1(2), 269-282.
- Schönig, Claus. (1998) A new attempt to classify the Turkic languages (3). *Turkic Languages*. vol.2, 130-151.
- Seegmiller, Steve. (1996) *Karachay*. München/Newcastle: Lincom Europa.
- Simpson, Cyril Gordon. (1955) *Some features of the morphology of the Oirat (Gorno-Altai) language*. London: Central Asian Research Centre.
- Tekin, Talat. (1991) A new classification of the Turkic languages. *Türk Dilleri Araştırmaları*. vol.1, 5-18.
- 江畑 冬生 (2017) 「トゥバ語との対照から明らかになるサハ語の規則性と義務性」『北方言語研究』 第7号, 23-33.
- 江畑 冬生 (2020) 『サハ語文法：統語的派生と言語類型論的特異性』 勉誠出版.
- 庄垣内 正弘 (1988) 「カラカルパク語」 亀井 孝・河野 六郎・千野 栄一 (編)『言語学大辞典 第1巻』 1273-1276. 三省堂.
- 庄垣内 正弘 (1989) 「チュルク諸語」 亀井 孝・河野 六郎・千野 栄一 (編)『言語学大辞典 第2巻』 937-950. 三省堂.
- 庄垣内 正弘 (1992) 「ハカス語」 亀井 孝・河野 六郎・千野 栄一 (編)『言語学大辞典 第3巻』 98-101. 三省堂.
- 中嶋 善輝 (2013) 『カザフ語文法読本』 大学書林.
- 胡振华 (1996) 「有关黑龙江省柯尔克孜族的部分语言材料」『民族語文』 第5期, 70-80.
- 钟进文 (2007) 『西部裕固语描写研究』 民族出版社.

Alternation Pattern of Suffix-Initial Consonants in the Northeastern Branch of Turkic

Fuyuki EBATA
(Niigata University)

Keywords: Turkic, Classification, Morphophonology, Nasal-type alternation

This study investigates the alternation patterns found in suffix-initial consonants among Turkic languages of the Northeastern branch. It particularly explores four languages, namely Sakha, Tyvan, Khakas, and Shor. The following conclusions are obtained from the study. First, in Sakha, all the suffix-initial consonants exhibit a nasal-type alternation regardless of their articulatory position. Second, in Tyvan, Khakas, and Shor, the occurrence of the nasal-type alternation is conditioned by articulatory position. All the bilabial suffixes undergo nasal alternation whereas none of the velar suffixes do. Third, in the above three languages, there are two types of alternation in alveolar suffixes. Those that appear with /l/ after a vowel stem undergo nasal alternation, while those that appear with either /d/, /n/, or /z/ after a vowel stem do not. Interestingly, this distinction is reflected in a different way in Sakha, i.e., different initial consonants after vowel stems (/l/ and /t/ respectively). Fourth, the alternation pattern of the ablative suffixes is an exception and shows the difference among the four languages. Fifth, in contrast to the Northwestern Turkic languages, nasal-type alternation is a characteristic of Northeastern Turkic though some Northwestern Turkic languages sporadically have nasal-type alternation, especially with the ablative suffixes.

(えばた・ふゆき ebata@human.niigata-u.ac.jp)